

第Ⅲ部第二章

尼崎の古代

第一節〈入門編〉

『尼崎市史』にみる
尼崎の古代



猪名寺廃寺創建期の軒丸瓦と軒平瓦
尼崎市教育委員会所蔵

や猪名県、住吉神社にまつわる痕跡を拾い出して、それを戦後古代史学の部民制、古代氏族、ミヤケ制研究などの成果に照らし合わせ、歴史的事実を考定しています。

第二節では国・郡・里制、条里制など律令国家が成立した段階における、尼崎の地域支配を制度的に明らかにしています。とりわけ聖武天皇没後に皇室から東大寺に施入された猪名荘に関わる「東大寺領猪名庄絵図」（摂津職河辺郡猪名所地図、本書第一部掲載）の分析から導き出された川辺郡の条里の復元、海岸部の開発と東大寺による大土地所有の進行の実態を明らかにしています。また、猪名寺廃寺の発掘調査の成果が記述され、法隆寺式の伽藍である点や猪名寺廃寺周辺の歴史的環境について言及しています。

この二つの節による古代国家の形成、律令国家の確立期の記述の特徴は、次の点が指摘できます。

第一に、戦後の古代史研究の成果を踏まえて、記紀の史料批判を経たうえで記事を扱うとともに、氏族分布など客観的な古代史料にもとづいた尼崎の古代地域史叙述であるということです。古代の尼崎市域、摂津国川辺郡レベルの編年史料を集成した史料編第四巻の刊行をともなったことも重要です。

第二に、国・郡・里制、律令税制などの一般的解説に陥りがちな市町村レベルの古代地域史叙述にあって、川辺郡条里の復元、猪名荘にみる東大寺による土地開発対象地の比定、猪名寺廃寺の発掘成果など、地域の具体像をともなう古代史叙述がなされたことは、尼崎地域が古代史研究の優良なフィールドであることを示しました。

第三に、第二章考古編とも共通しますが、古代の尼

一、『尼崎市史』古代編

史料編をともなう古代史編さん 大正時代に編さんされた『尼崎志』^{〔1〕}以来の総合的な尼崎市の歴史編さんとして、市制五〇周年記念事業に位置付けられたのが昭和四一年（一九六六）刊行開始の『尼崎市史』であり、その第一巻第二章・第三章が原始時代・古代にあたります。これに対応する古代の史料編が第四巻（一九七三）、第一巻・別編二（一九八〇）が考古資料編です。ここでは古代史研究の立場から、『尼崎市史』通史編原始時代・古代編の研究視角と歴史叙述の特徴、研究史上の意義をふり返ります。以下、章・節を追って、研究視角と歴史叙述の特徴をみていきます。

第二章―考古学からみた尼崎― 第一巻の考古学の章・節を執筆したのは村川行弘氏です。尼崎市域は沖積平野であるところから、縄文時代晩期までは人類の生活の舞台とはならず、当時の海岸線近くに位置する庄下川川床、猪名川川床の遺跡から遺物散布地が検出されるに過ぎません。弥生時代の遺跡としては、昭和四〇年にみつかり当時調査中だった田能遺跡に着目しており、大規模集落址、方形周溝墓と木棺墓、碧玉製管玉、多量の磨製石剣などがみつかったこの遺跡を、古代国家胎動期の低地性農耕社会の様相を知る手がかりとして高く評価しています。猪名川河畔では椎堂猪名寺、下坂部、若王寺などから弥生時代の遺物が出土し、古墳時代へと連続する様相が叙述されます。

古墳時代の遺跡・遺物では池田山古墳、水堂古墳、天狗塚古墳（大塚山古墳）、伊居太古墳のほか、大規模な集落遺跡で鉄滓、鞆の口などが出土した若王寺遺跡

などをとりあげています。

この章は弥生時代、古墳時代の尼崎を次のように特徴付けています。

第一に、弥生前期の人びとの生活の場は海岸に近い低湿地で、中期以降谷あいや丘陵地に集落が広がっていること。

第二に、古墳時代については市域内の古墳の大部分が削平などによって消滅していることを踏まえながら、塚口、南清水、下坂部、水堂付近に有力な氏族が存在した可能性を指摘し、彼ら古墳に葬られた権力者たちが軍事的な指導者であり、ヤマトの王権との関わりで国内統一や朝鮮半島進出に積極的に関与した勢力であることを想定しています。

そのことと関わって、第三に、尼崎地域は王権の港湾である大阪湾の西よりの河口部に位置しており、そのことが古墳時代以降の歴史を規定している点を指摘したことです。それゆえこの地域の古墳被葬者が、王権に帰属しながらも地域において独自の勢力を持ち、鉄製農具や鉄製工具を副葬するなど単なる農業開拓者の性格だけでない、尼崎地域特有の木工生産、祭祀などにあずかる有力者であった可能性を示唆しています。

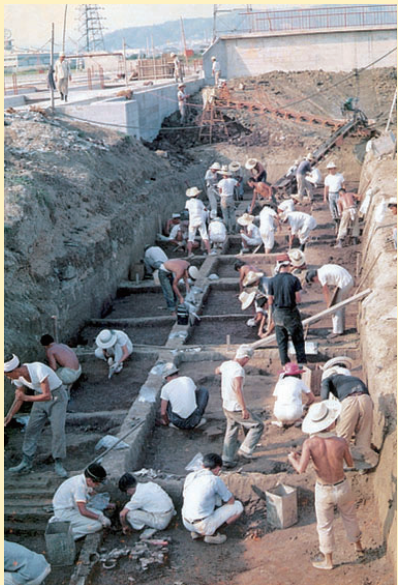
第三章第一節・第二節―古代国家段階の尼崎― 第三章の大部分は長山泰孝氏が執筆し、条里制と猪名荘に関わる部分は渡辺久雄氏の執筆によりります。

第一節では、いわゆる大化前代の尼崎の本格的な通史を叙述しています。神話と歴史を区別したうえで、^{とが}英餓野の鹿の物語などを含め、『古事記』『日本書紀』（以下、記紀）の伝承的な物語からも、古代の尼崎の姿を探っています。ほかに、猪名部・佐伯部、為奈真人

『尼崎市史』が企画された昭和 30 ～ 40 年代は、市内の重要な遺跡の発掘が開始された時期でした。次々と明らかになる最新の発掘成果が、古代編の記述にいち早く取り入れられました。



上ノ島遺跡出土の弥生式土器 同遺跡は昭和三〇年代に数次発掘され、弥生時代前期の大量の遺物が出土した。



昭和四〇～四一年に実施された田能遺跡の発掘調査。市民や学生・生徒たちが発掘調査に参加した。（写真は千坂吉郎氏撮影、薄井昭一郎氏寄贈写真帳より）



猪名寺廃寺跡を視察する薄井一哉市長、昭和 33 年頃



猪名寺廃寺の塔心礎

崎が大和王権直轄の港湾である「大阪湾岸地域としての特殊性」を持つことを明瞭にし、それにもとづいた地域史の把握・叙述に成功した点は、自治体史の古代地域史として出色だったといえます。

第三章第三節―平安時代の尼崎―
古代編の平安時代を執筆したのは、戸田芳美氏です。第三章第三節は、

神崎川河口の河尻が瀬戸内海航路の港として発達し、長洲浜や大物が歴史の舞台となる時期を叙述しています。荘園同士の争いが頻発した尼崎の中世前期の特徴をどうみるかについては、本書第Ⅲ部第三章「尼崎の中世」第一節に譲り、ここでは、古代末期の尼崎の特徴についてみておくこととします。

神崎川水上交通上の要衝である河尻、大物に対しては、検非違使が檢察権を行使し、その近辺には摂関家領も数多く設置されていました（野間荘、大島雀部荘、富松荘が左大臣藤原頼長領。保元・平治の乱の後には、乱の関係者たちがそれぞれの権限・権益を行使し、また現地の在庁官人、荘官、在地武士、神人らと結んで、尼崎地域においても対立・押領・荘園侵略を繰り返していました。平氏政権下では、平清盛の参謀格・五条大納言藤原邦綱の寺江山荘が京都・鳥羽と福原を結ぶ淀川水運上の中継地となり、多くの貴顕が宿所としたことに中央政権と尼崎の地との関わりをみています。

一方で、中央権門に対して農民・海民・芸能を事とする神崎の遊女など、尼崎の住民が自立性を高めていく動向が叙述されます。平安時代の尼崎の本格的な通史として、第四章「中世の尼崎」につなげられています。

二、市史第一巻以降の尼崎古代史と『尼崎地域史事典』

『地域史研究』等に掲載された古代史研究
市史第一巻刊行以降の尼崎地域の古代史研究の進展について、地域研究史料館刊行の『地域史研究』掲載の論考を中心にみていきます。

本項末尾に『地域史研究』掲載の原始・古代に関する論文・史料紹介の一覧を掲載しています。いくつかにグループ分けできますが、まずはじめに、市史第一巻執筆者によってその後研究が深められた論考があります。第一巻第二号の村川行弘「古代における猪名川水系の開発」、第二巻第二号の長山泰孝「猪名県と為奈真人」、第二巻第三号の渡辺久雄「条里遺構の解釈をめぐって」、第四巻第二号の同じく渡辺久雄「長洲から尼崎まで」、第八巻第二号の村川行弘「田能出土の銅剣鏹型」などです。

村川氏の論考は猪名川水系の文化圏・生活圏を北摂・西摂地域、近畿全体のなかで位置付け、弥生時代において猪名川水系は大規模集落群が展開するにもかかわらず銅鐸については六甲山系に密であること。古墳時代以降については、渡来人の居住、大阪湾岸に位置する軍事的要素、「神を祭る」清浄な地であることなどが猪名川水系の特徴であると指摘しています。

長山氏の論考は、市史第一巻の叙述に対して、猪名県主の後身が為奈公（真人）であるとする批判が寄せられたため、猪名県主は没落し、替わって宣化後裔の為奈公が台頭したと再論したものです。

渡辺氏の論考は尼崎の土地進展について、自然地理

の地域には王宮が設置されたとみて、王宮に奉仕するかたちで王権と政治的関係をもった集団が猪名地域には早くから配置されていた可能性を追究しています。

王宮に奉仕する集団は王宮が存在する大和などの地名（王宮名）を称し、各地に配置された奉仕集団はこれらの地名（部名）を共有しました。尼崎市内に存在する猪名、額田、雀部、六太、棕橋、橘（立花）などの地名がそれです。猪名と橘の地名分布は、尼崎の猪名を経由し大和の飛鳥と但馬をも結ぶ奉仕集団の広がりの痕跡とみています。

これらの研究は、尼崎地域の歴史を中央の政治史との関わりだけで考察するのではなく、大阪湾岸、猪名川水系・武庫川水系を結ぶ水上交通や内陸交通路に着目しながら、大和王権に代表される中央の政治と尼崎地域との関係を、これら諸地域間を結ぶ広域的な交通関係のなかで理解しようとするものです。

王権と特有の関わりをもったこうした歴史を前提として、猪名地域には律令制段階に入ってから多くの荘園が設置されました。猪名荘に関わるその後の論考をあげると、『地域史研究』第二六巻第三号掲載の田中文英「永観の東大寺経営と猪名・長洲荘」は、東大寺別当・永観による教団経営、猪名・長洲荘園支配に果たした役割と功績を詳細に明らかにしています。

猪名所地図については、第三一卷第一号掲載の浅岡俊夫「東大寺領猪名庄の位置とミヤケ開発」、第三一卷第三号掲載の同「猪名庄荘図からみた古代地図の表現」があります。前者は、絵図から猪名荘の位置を比定するにあたり、条里ではなく現地の微地形や小字界とを照合して荘園の範囲の復元案を示しました。後者は、荘園図の図的表現を検討したものです。

学データ、大字・小字地名、その他の文献史料に加えて歴史地理学の微視的・巨視的な観察方法を駆使し、尼崎の砂州の出現を一〇世紀、人々の生活空間としての出現を一一世紀と考定しています。

最近の論考としては第三七巻第一号掲載の西本昌弘「行基設置の楊津院と河尻」が、従来、川辺郡楊津郷を猪名川上流域の木津周辺に比定してきたことに対し、行基年譜記載の楊津院、及び中世の楊津荘は瀬戸内海運を利したもので、尼崎市内の河尻付近に比定すべきことを論じています。

第一一一号掲載の黒田慶一「難波「八十嶋」と神崎川・猪名川下流域」は、加島遺跡、ならびに近年調査された加島一丁目所在遺跡のデータから、これらの地では古墳中期に中州の形成が始まっていたこと、八十嶋祭が行なわれた砂州の先端が加島遺跡周辺である可能性を論じています。平安貴族にとって神崎川河口の地が「難波」と認識されたとして、尼崎と「難波」の関係に一石を投じました。

猪名部・猪名県と猪名荘研究
ここでは猪名部・猪名県、及び猪名荘関連について、市史第一巻以降の研究を取りあげます。

猪名県をめぐっては、長山泰孝氏による市史第一巻の叙述と『地域史研究』第二巻第二号の論考が支持され、猪名県主と為奈真人を別個の氏族とみることによって研究が進展しました。

吉田晶氏は、川辺郡司としてその名がみえ、宣化の庶妃を出したことにより威奈公氏（後の為奈真人氏）及び尼崎市内に関連地名を有する川原公氏、椎田君氏など宣化後裔王族の外戚となった大河内直氏（凡河内直氏）に注目しました。吉田氏は、凡河内

鷲森浩幸氏は『日本古代荘園図』において、猪名所地図の成立過程と開発の過程を詳細に検討しています。小山田宏一氏は猪名荘域の水利を復元し、堤防を築くことによって開田していった猪名荘の開発を、干拓技術以前の開田技術とします。

『尼崎地域史事典』の原始・古代項目
平成八年（一九九六）に刊行した『尼崎地域史事典』における原始・古代に関連する項目数は約一六〇項目、市史第一巻に掲載された固有名詞や、この時代の基本的事象について採録されている一方、原始及び考古学の遺跡、荘園などについては市域にとどまらず周辺地域の項目も取りあげてあり、西摂地域全体の状況を知るうえで有益です。猪名川などの地形項目や、市内の大字地名の項目も、古代史を調べるうえで欠かせない情報です。

三、市史第一巻・第一一巻以降の市域遺跡の発掘成果

新たな発掘成果と尼崎の原始・古代史像
市史第一

巻も、当時発掘されたばかりの田能遺跡の発掘成果を取り込んで叙述されましたが、それ以降も尼崎市域ではさらに画期的な遺跡が発掘されています。次項で述べる『図説尼崎の歴史』の叙述にも反映された、おもな遺跡についてここで紹介します。

武庫庄遺跡
武庫之荘本町二丁目の、伊丹段丘上に立地する弥生時代中期から鎌倉時代にかけての複合遺跡で、平成八年度の第三六次調査に際し近畿地方で最大規模の柱根が発掘され、方形の区画に囲まれた独立棟持柱を有する弥生時代中期の大型掘立柱建物が検出されたことで注目された遺跡です。方形区画の外側

このように、旧市史の段階では「大阪湾岸地域としての特殊性」という視覚を打ち出しつつも、具体的な氏族の動向については川辺郡レベルの分析にとどまっていたですが、その後の研究の進展で西摂レベル、さらには摂津・河内全体を俯瞰する形で大阪湾岸地域の王権との関わりを具体的に描き出す研究が登場するようになりました。

前掲高橋論文、鷲森論文を受けて、古市晃氏はこ

にも竪穴住居群や掘立柱建物群があり、さらにその外側に方形周溝墓群が存在するところから、弥生時代の拠点集落のひとつだったことがうかがえます。低地性農耕集落である田能遺跡との対比という点でも、弥生時代のムラからクニへと発展していく過程を具体化する手がかりになる遺跡です。また、年代比定には柱根木材の年輪年代判定が使われ、紀元前二四五年頃に伐採された木材であることがわかりました。

猪名庄遺跡 「潮江字東大寺」の地名から、猪名荘に関わる遺跡であることが以前から確認されていましたが、阪神・淡路大震災後の再開発事業にともなう発掘調査によって画期的な発見がありました。平成九年の調査で鎌倉時代前期の掘立柱建物二棟、井戸九基など、平安時代中期から後期の掘立柱建物八棟、井戸四基など、奈良時代後期の掘立柱建物四棟、井戸一基などが検出されました。とりわけ奈良時代の建物は、猪名荘成立後間もない時期のものであり、出土地点からも猪名所地図の「宮宅地」、つまり荘園の管理施設の建物にあたる可能性が高いものです。同時期の井戸からは「西庄」と墨書された土師器も出ています。また、猪名荘以前の古墳時代後期の水田跡が洪水層で埋められた痕跡がみつかり、猪名荘以前の古墳時代からこの地が開発対象地であった様子がうかがえ、猪名荘前史についても知見が得られました。

大物遺跡 大物遺跡（大物町二丁目）の調査は、当該地に建設予定の市営住宅が阪神・淡路大震災の復興住宅に指定されたために、平成七年四月から五か月限定で行なわれ、一二世紀―一三世紀後半の遺物がコンテナ約三五〇箱分、一七世紀―一九世紀の遺物が約二五〇箱分出土しました。中世の遺物には、土師器、

瓦器、国産陶器、さらに白磁・青磁などの貿易陶磁器と漁網の土鍾、鞆羽口などの土製品、将棋駒を含む生活用具・遊具、履物、装身具、荷札木簡などの木製品、銭貨、経石などが大量に含まれています。土器には九州系、瀬戸内系、東海系のほか、貿易陶磁器が多数みられ、物資・人間の広範囲な行き来がうかがえます。

大物遺跡の遺物からわかることは、平安末から鎌倉時代の大物浦（浜）は海上交通の要衝として栄え、しかも単なる漁村ではなく各地の荘園からの物資を都へ運ぶ輸送の中継地であるとともに、この付近で生活する農民・漁民・職人をはじめ物資を交易する富裕な商人など、さまざまな階層の人々が行き交う交易都市だったことです。

猪名庄遺跡、大物遺跡の発掘成果は、次に述べる『図説』の猪名荘や中世の港津都市の叙述に活かされており、武庫庄遺跡の大型掘立柱建物の画期的意義はコラムに紹介されています。これ以外にも、地域の弥生―古墳時代、あるいは歴史時代の集落遺跡、生産遺跡の発掘成果は、かなり蓄積されてきています。考古学の成果によって、尼崎地域の歴史がどのように描かれるのが、今後の課題です。

四、『図説尼崎の歴史』古代編

平成一九年刊行の『図説尼崎の歴史』の古代編は、市史第一巻・第四巻・第一―巻を下敷きにしながらも、その後の古代史研究や遺跡の発掘成果を反映したものとなりました。図説のスタイルで叙述することから、史料、遺跡・遺物、地図などを図版で示しながら、尼崎の古代史像を構成しています。そのことによる特徴

ています。六世紀になって桜塚古墳群東群と猪名野古墳群の古墳築造が停止されることは、継体大王の今城塚古墳の出現と連動していることが指摘され、継体の登場により西摂地域の歴史が新たな段階に入ることが考古学的に明らかにされています。

古代景観の復元と猪名湊・猪名荘 市史第一巻が、すでに古代の尼崎の「大阪湾岸地域としての特殊性」を指摘していたのを継承発展させる形で、『図説』は古代の景観を図版・地図で可能な限り復元しつつ、王権直轄の港湾・所領としての性格を浮き彫りにしました。序説2「尼崎市域の微地形」により旧海岸線や旧流路が示されたことが、古代編でも活かされています。第一節3「大和王権と猪名川流域」では、万葉歌に詠われた古代の景観をも手がかりにして、王権にのつての猪名湊、武庫水門の役割を論じています。

その後の猪名荘・猪名所地図研究の進展、猪名庄遺跡の発掘成果をも踏まえて、第二節3「猪名荘の成立と地域開発」では奈良時代から平安時代の尼崎海岸部開発過程を具体的に描き、4「猪名荘絵図を歩く」は、猪名所地図を読み解きながら現在の尼崎市内への現地比定を行なっています。地理・地形編ともいえる序説「尼崎の歴史の舞台」の2「尼崎市域の微地形」により砂州列が検出され、その形成プロセスが示されたこととあわせて猪名所地図読解の研究成果が活かされ、荘園開発のプロセスについても新たな知見が得られました。海岸の干拓をめぐる最新の成果についても序説のコラム「近代の干拓技術」として掲載しました。

このように、古代の地域景観が現地の微地形、歴史地名及び残された絵図、そして考古学の発掘成果とによってこれだけ復元できることは、希有な事例です。

と、おもな内容を紹介していきます。

古代編の構成の特色 『図説』古代編のなかの縄文時代・弥生時代については、考古学によって明らかにされることとなります（尼崎市域には、叙述に活かし得る顕著な縄文遺跡が存在しません。文献古代史学は文字史料が出現した弥生時代以降を対象としますが、尼崎地域の弥生時代については叙述ができません。古墳時代については考古学と文献古代史学によって叙述されますが、両者は研究方法と認識を異にしますから、同じ古墳時代を対象としながらも別々に叙述されることになります。古代編は、六世紀前半の継体大王の出現をもって二つの節に分けることにしました。

第一節「古代社会の黎明」は、考古学と文献古代史学によって項目を別々に叙述し、文献古代史学にもとづく叙述は、猪名湊と猪名県に象徴される港湾地域と交通の要衝としての尼崎地域の特性に焦点をあてて叙述しています。

第二節「律令国家の形成と展開」は、継体後裔の王族によってこの地域の開発が進展したことから叙述を始め、それが猪名荘となっていくという道筋で、律令国家時代の尼崎の地域史を描いています。猪名寺廃寺についても、それを白鳳時代の政治史と結びつける意図でコラムを設けてあります。具体的なフィールドに焦点をあてた飛鳥―奈良時代史の叙述となっており、律令制の制度史的内容は最小限に抑え、地域に密着した古代地域史となっています。そのため、神崎川開削以降、河尻や猪名荘に新しい動向がみえ始めたところで叙述を中世編に譲っています。

考古学にみる西摂地域の動向と大和との関係 市史第一巻の段階で田能遺跡が発見されており、市域に水

王権の所領から東大寺領へ 猪名川河口域が大和王権膝下の港湾であったことと、東大寺領猪名荘が聖武上皇没後に天皇家から勅施入されたことを結びつけて考えると、この地が王権の所領であったことがみえてきます。猪名部集団や猪名湊・武庫水門に関する研究が、猪名川河口域の軍事的性格や猪名荘施入以前からの当地の水田開発を指摘していることを踏まえて、第一節4「海陸交通の掌握と部民の設置」は、王権の政策的意図によってこの地域に幾種類かの部民が配置され、港湾施設が維持されてきたことを論じています。さらに平安期においても、猪名川流域の未開地が王権の狩猟地として禁猟区とされ特別視されていたこと、その背景として、かつて猪名牧（為奈野牧）が置かれ、狩猟集団である佐伯部にまつわる猪名県の伝承が存在することを指摘しています。このような特性が、歌枕「猪名の笹原」などに系譜していくのです。

このような認識から、『図説』では継体後裔王族の威奈君・為奈真人氏に注目しました。従来の研究では猪名部造氏―猪名部集団と為奈真人氏との関係をさまざまに論じてきましたが、第二節1「王族の集住と直轄領」は両者は別系統とみて、六世紀に入ってから継体の摂津進出（淀川右岸への今城塚古墳の築造）を前後して尼崎の地が為奈真人王族の集住地となり、王権所領として開発がなされたとの見方をとっています。このことは、西摂における古墳築造のあり方の変動ともリンクするものです。

古代史への関心と学習の深まり 市史第一巻が刊行される直前の昭和四〇年、園田の工業用水道配水場建設工事中に、当時近畿でも有数の大規模遺跡である田能遺跡が発見されました。工事と同時並行で、人員と

稲耕作が開始され本格的な集落が展開するのは灌漑施設をとまわらない低湿地だったという認識は、『図説』も同様です。第一節1「西摂平野の開拓」では、弥生集落遺跡の検出が進み、西摂地域でも弥生時代前期後半に小河川に堰を設けた例が発見されたこと（市域近くでは伊丹市岩屋遺跡）、弥生時代中期になると猪名川・武庫川中流域の段丘上にも集落が展開し、そのなかに大規模集落が出現したことが指摘されています。そのきっかけが武庫庄遺跡の発見であり、大型建物が注目されました。近年、弥生時代の実年代が再検討されつつあるなか、柱の木材を年輪年代法により調べたところ、弥生時代中期の実年代が約一〇〇年以上遡ることが判明しました。コラム「大型掘立柱建物」「柱根と年輪年代」で具体的に遺跡を紹介しながら、その意義を解説しています。

古墳時代については、市史第一巻も西摂地域と大和王権との関わりを論じ、市域の古墳被葬者たちを単なる農業開拓者ではない、王権の軍勢力を支えた軍事的指導者と想定していました。その後、大和の中枢勢力について、大和盆地南東部（大和古墳群・柳本古墳群）の勢力と大和盆地北部地域（佐紀古墳群西群）の勢力、そして古市古墳群、百舌鳥古墳群の勢力が区分されて論じられるようになりました。第一節2「古墳の築造と展開」は、西摂地域では古市・百舌鳥古墳群の勢力と連動する形で豊中市の桜塚古墳群東群と尼崎市域の古墳群の築造が継続され、古墳中期に移行するとみえています。桜塚古墳群東群で鉄製甲冑の副葬がみられ、古市・百舌鳥古墳群の勢力との関係で軍事的色彩の強い被葬者像がうかがえるのに対し、猪名川右岸である市域の古墳被葬者はそれとは異なった性格が指摘され

猪名庄遺跡を学ぶ市民の取り組み

阪神・淡路大震災後、JR 尼崎駅北側の再開発工事現場から、古代の東大寺領荘園猪名荘の貴重な遺跡が発掘され、大きな関心呼びました。復興工事を優先させつつ、きちんとした発掘調査を行ない、その成果を学んで被災地のアイデンティティ形成に役立てようと、歴史学会や住民団体の取り組みが始まりました。その視点は、歴史・文化をまちづくりに活かす取り組みとして、今日に至るまで継承されています。



地元住民が結成した「猪名荘遺跡を学ぶ会」によるフィールドワーク、鈴木景二・富山大学人文学部助教授の案内により遺跡周辺を歩き、原地形をさぐる（平成10年3月）



歴史学会のボランティア団体・歴史資料ネットワークによる猪名庄遺跡発掘現場の視察見学（平成9年3月）

調査期間が不足するなか緊急調査が行なわれ、市民、学生・生徒、専門家によるねばり強く幅広い運動によって、遺跡が全面保存されるという画期的なできごとがありました。田能遺跡の発掘調査の成果は市史第一巻に取り入れられ、その後の尼崎地域の古代史像に大きな影響を与えていることは、すでに述べたとおりです。その後も画期的な遺跡の発見が相次ぎ、武庫庄遺跡、猪名庄遺跡、大物遺跡などの発掘成果が『図説』に反映されています。

画期的な遺跡の発見は尼崎の歴史を書き換え、全国的に注目されるだけでなく、人々に地域の歴史への関心を喚起していきます。田能遺跡では、住民の関心の広がりや遺跡の保存につながりました。そのプロセスを、第一節のコラム「田能遺跡の発掘調査」が詳細に紹介しています。

尼崎では、史跡、遺跡に関心を抱いた地域の人びとがみずから学習を深め、地域の歴史を知ることによって、史跡・遺跡、歴史的景観の保存やそれらを活かしたまちづくりに進んでいくことが盛んに行なわれています。その先駆が田能遺跡の調査・保存運動であり、その後も猪名荘の故地とわかった潮江地区周辺の人びとが始めた「猪名荘遺跡を学ぶ会」の活動、地名にも

なっている古代寺院・猪名寺廃寺と、その周辺の自然林に目を向けた猪名寺自治会の取り組みなどがあります（活用事例については本章第三節〈実践編〉3参照）。

おわりに
——古代史研究における尼崎地域史の意義——

尼崎の古代史が、時代とともに編まれてきたことをふりかえってきました。尼崎が古代史の良好なフィールドであることと、人びとが地域の歴史を知り、地域の史料、史跡・遺跡などを大切に伝えてきたことよってさらなる歴史研究が進展してきたことが、確認できたことと思います。

市史第一巻の原始時代・古代史叙述は、考古学的には尼崎市域における低湿地帯と丘陵地帯の生活史から始まり、文献古代史学は川辺郡レベルの古代史料収集に裏付けられていました。しかし、すでにそこには「大阪湾岸地域としての特殊性」の指摘があり、猪名川水系の文化圏と六甲山系の文化圏との対比という視角も打ち出されていました。

市史第一巻以後は、二つの方向で研究が進展していったといえるでしょう。

ひとつは、従来から文献史学と考古学との共同がいわれてきましたが、尼崎は地理学、自然科学的な地形環境分析を含めて、考古学による遺跡の発掘成果についても歴史的景観、歴史地名、絵図を含む文献情報と具体的に突き合わせて、研究成果を得ることが可能なフィールドであるということです。そうした地域の文化財、歴史遺産を保存するうえで、地域の歴史に対する市民の関心・取り組みが実践されてきた地域でもあ

ります。

二つ目は、尼崎を大阪湾岸・瀬戸内海の海上交通及び、猪名川水系・武庫川水系沿いの海陸の交通上において、歴史的にとらえるという視点です。大和（平安以降は山城）の中央政治権力の影響を受けながらも、同時に河内・北摂・丹波・播磨・但馬など西摂周辺諸地域との広域的な交通のなかで、尼崎の地域史が展開しているとの見方です。尼崎は、奈良や京都の中央政治権力と地理的にも政治的にも距離がありながら、政争・戦乱に巻き込まれてきました。尼崎の地域史を理解することは、中央の政治史と広域的な政治動向の接点を知ることであるという意味で、古代史研究全体にとって重要な意義があるといえるでしょう。

もちろん、このような地域は尼崎だけではありません。広域的な交通関係のなかで、中央の政治権力と関わりをもつような地域の類型をほかにも見出すことによって、日本史全体のなかで地域の歴史が持つ意味をさらに深めていくことができるでしょう。

〔注〕

- （1）『尼崎志 第一―三篇』（尼崎市、一九三〇―一九三五）
- （2）吉田晶『日本古代国家成立史論 国造制を中心として』（東京大学出版会、一九七三）
- （3）加藤謙吉「猪名県に関する二、三の問題」（同『大和政権と古代氏族』吉川弘文館、一九九一、初出は竹内理三編『古代天皇制と社会構造』校倉書房、一九八〇）
- （4）鷲森浩幸「猪名の王家所領と武庫水門」（『大手前史学研究所紀要』第二号、二〇〇三・三）
- （5）古市晃「為奈の王族と王宮―王族の住まう地域、尼崎―」（『為奈とタチバナとタチマモリ伝承―尼崎の「立花」の地名―』（ともに坂江渉編『神戸・阪神間の

古代史』神戸新聞総合出版センター、二〇一三、同「六世紀における西摂・猪名の王宮とその意義」（『大阪上町台地の総合的研究』大阪市博物館協会大阪文化財研究所・大阪歴史博物館、二〇一四）

（6）鷲森浩幸「摂津職河辺郡猪名所地図」（『日本古代荘園図』東京大学出版会、一九九六）

（7）小山田宏「『東大寺領猪名庄の築堤開田』（『大阪府立狭山池博物館研究報告』第四号、二〇〇七）

〔執筆者〕高橋 明裕

尼崎市立地域研究史料館紀要『地域史研究』掲載尼崎関係古代史論文・史料等一覧

〔論文〕

- 古代における猪名川水系の開発―考古学からの考察― 村川行弘 第一巻第二号
- 猪名県と為奈真人 長山泰孝 第二巻第二号
- 条理遺構の解釈をめぐる 渡辺久雄 第二巻第三号
- 長洲から尼崎まで―土地進展の歴史地理― 渡辺久雄 第四巻第二号
- 式内伊居太神社の所在地比定をめぐる諸問題 小野寺逸也 第七巻第二号
- 田能出土の銅剣・銅型―武器・形器の編年基準― 村川行弘 第八巻第二号
- 源平争乱期と南北朝期の戦いにおける個と集団―『平家物語』と『太平記』にみる― 中村徳雄 第一八巻第一号

- 野田宮古墳について―塚口・猪名野古墳群地帯での新発見― 小野寺逸也 第二〇巻第三号
- 永観の東大寺経営と猪名・長洲荘 田中文英 第二六巻第三号
- 古代の猪名地方における猪名部と猪名県 高橋明裕 第二九巻第三号
- 東大寺領猪名庄の位置とミヤケ開発 浅岡俊夫 第三一巻第一号
- 猪名庄荘図からみた古代地図の表現―図的表現に関する覚書― 浅岡俊夫 第三一巻第三号
- 源融伝承考 宮崎亮太 第三三巻第二号
- 「大覚寺縁起絵巻」と「槻峯寺建立修行縁起絵巻」 高岸輝 第三三巻第一号
- 行基設置の楊津院と河尻 西本昌弘 第三七巻第一号
- 難波「八十嶋」と神崎川・猪名川下流域 黒田慶一 第一二二号
- 『住吉大社神代記』の神領記述の歴史性 高橋明裕 第一一五号

〔史料〕

- 『大日本地震史料』所載摂津関係記事抄 市史編修室 第四巻第一号
- 『史料綜覧』所収尼崎および近辺関係記事抄（一） 地域研究史料館 第九巻第一号

Column

阪神・淡路大震災と埋蔵文化財

阪神・淡路大震災の発生と当初の対応

大震災が発生した平成七年（一九九五）一月当時、尼崎市では一〇六個所の遺跡が文化財保護法により周知されていました。

尼崎市教育委員会は、震災当日から甚大な被害を被った歴史的な建物、とりわけ国や県・市指定の文化財建造物の被災状況把握と、その復興に向けた関係機関との調整に追われていました。そんななか、一月下旬には一〇六個所の遺跡を職員が隈なくめぐり、土地の陥没や崩落など被害の有無を確認するとともに、そこに建つ民家等の被災状況の把握に努めました。その結果、土地の陥没など各遺跡への直接的な被害は認められませんでした。遺跡の範囲内に建つ多くの建物が被災している様子が見てとれ、かなりの数の建物の建て替えが予想されました。

埋蔵文化財の取り扱い方針

二月に入ると、激甚災害指定の県下十市十町の被害状況及び土地区画整理事業等の復興計画に関する兵庫県教育委員会の聴き取り調査があり、あわせて復興事業における埋蔵文化財の対応についての意見交換が行なわれました。これを踏まえて、二月三日、文化庁から復旧事業に係る埋蔵文化財の当面の取り扱いについての通知があり、五月までに着工される一定の復旧事業は事前の届出を要しないとする緩和措置が示されました。

さらに三月二九日、文化庁が復旧・復興事業にともなう埋蔵文化財の取り扱いに関する基本方針を示し、関係府県が市町村の意見を聴いて取り扱いの細目を作成することになりました。四月二八日には兵庫県教育長から細目を定めた適用要領が示され、さらに具体的な「取り扱いマニュアル」の作成作業が県と市町文化財担当職員によって進められました。

こうした一連の文化財担当職員による協議の過程で、さまざまな意見が出されました。当初は「埋蔵文化財の調査が復旧・復興の妨げになるのではないか」「遺跡の発掘調査を実施することについて、住民の理解が得られるだろうか」「文化財担当職員も災害対応要員であり、調査できる体制ではない」といった意見もありましたが、「復興事業への影響を極力抑え、遺跡の保存と記録を残す方法を考えよう」ということで検討が進められました。このとき作成された「取り扱いマニュアル」の考え方が、その後に定められた兵庫県の埋蔵文化財取扱基準の基礎となり、今日に生かされています。

また、文化庁からは、以下の三点セットにより国として被災自治体を支援する、という方針が伝えられました。

- ①文化財保護法の改正は行なわないが、被災地での埋蔵文化財の取り扱いについては弾力的な対応を行なう。
- ②全国の都道府県、政令指定都市に埋蔵文化財専門職員の派遣を要請し、人的支援を行なう。
- ③調査経費の負担を軽減するため、国庫補助金を確保する。

これにより、平成七年四月に兵庫県教育委員会埋蔵

て、平成七年四月に始まる大物遺跡の発掘調査から平成一二年三月に終了する栗山・庄下川遺跡の発掘調査まで、一五件の発掘調査については四人の市職員で対応しました。こうして、平成一一年度までの五年間に、市内での復旧・復興事業にともなう発掘調査は一五遺跡二三件、調査面積は一・三ヘクタールとなり、平常時の四倍近い面積の調査がこの期間に集中しました。また、皮肉なことに、尼崎の歴史にとって特に重要な遺跡の発見も相次ぎました。

まず、大物遺跡の発掘調査によって、謡曲「船弁慶」の舞台として知られる大物の浦の様相がはじめて明らかになりました。白磁や青磁などの中国製陶磁器、西日本各地の日常食器が大量に出土したことで、一二、三世紀には西日本各地から大物に物資が運ばれてきていた事実を、確認することができました。さらに、扁平な石の全面に法華経を細かな文字で墨書きした経石や、荷札と見られる木簡、櫛・笄・扇などの装身具、包丁などの生活用具をはじめとする多種多様な出土資料を通じて、水運による物資集散地としての発展の様子、商人・職人・僧侶など各種階層の人々が行き交い賑わっていたこともわかってきました。

また、平成八年三月からの城内（現・明城）小学校校舎建て替えにともなう発掘調査では、尼崎城の中心建物の跡がみつき、尼崎城本丸平面図（尼崎市教育委員会所蔵）に描かれた本丸御殿の形状とヒタリと一致したのです。さらに、この発掘調査により、砂州の上に築かれた尼崎城の造成工事の様子や、江戸時代初頭に建てられた建物の基礎工事の工法も確認することができました。

続く平成八年五月からの武庫庄遺跡の発掘調査で

は、近畿地方で最大規模を誇る弥生時代の建物跡がみつかりました。調査終了後、取り上げられた柱の根元部分を輪切りにし、奈良国立文化財研究所（現・独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）の光谷拓実氏に年輪をくわしく調べていただいた結果、紀元前二四五年からさほど下らない時期に伐採されたヒノキを使った建物であることが明らかになりました。柱穴から出土した土器の年代が弥生時代中期後半であったことから、弥生時代の実年代を考えるうえからも、非常に重要な発見といえます。

さらに、ＪＲ尼崎駅北側の猪名庄遺跡では、市教育委員会が長年調査を重ね、捜し求めてきた奈良時代の柱穴の一部を平成七年三月の試掘調査で発見しました。この成果をもとに、平成九年一月から本格的な発掘調査を行なった結果、計画的に配置された奈良時代の二棟の倉庫跡と井戸跡などが確認され、天平勝宝八年（七五八）に孝謙天皇の東大寺への施入により成立した東大寺領猪名荘の、中心施設の様相が明らかになりました。

おわりに このように、古代・中世・近世と、尼崎の歴史にとってかけがえのない遺跡の発見が相次ぎました。平時であれば遺跡の保存方策について議論を重ね、後世に伝える方法も検討されたであろう遺跡であっても、住宅供給や被災建物の建て替えという、震災復興事業の迅速な対応のまにに、姿を消していきしました。このことも、私たちが忘れてはならない阪神・淡路大震災からの復興の教訓として、後世に伝えていかねばなりません。

（執筆者）益田 日吉

文化財調査事務所に復興班が組織され、兵庫県教育委員会の職員に加えて六月以降は全国から派遣された埋蔵文化財専門職員が加わり、各自治体が行なう発掘調査を支援する体制が整えられました。全国からの派遣専門職員は、平成七年度から九年度にかけての三年間で、延べ二一人に及びました。

大発見が続いた市内の発掘調査

最初に復興班の支援を受けて発掘調査に着手したのは、尼崎市です。平成七年七月に開始した道ノ下遺跡の発掘調査を皮切りに、平成一〇年三月の武庫庄遺跡の発掘調査まで、八件の発掘調査に対して延べ二四人の復興班職員が派遣され、発掘調査を支援していただきました。並行し



貿易により輸入された中国製の白磁・青磁などの大物遺跡から出土した陶磁器（尼崎市教育委員会提供写真）



迅速な復興を進めるため、被災した城内小学校校舎の解体撤去工事と並行して進められた尼崎城本丸御殿跡の発掘調査（現・明城小学校、尼崎市教育委員会提供写真）



猪名庄遺跡から出土した奈良時代後半の倉庫跡（尼崎市教育委員会提供写真）